

オオオニバス類の栽培について

落合葉子

熱帯スイレン温室において、オオオニバス (*Victoria amazonica*) とパラグアイオニバス (*V. cruziana*) を6月に定植したので、その生育状況を報告する。

1. 方法

(1) 植付

平成20年6月25日に温室の水槽内の木箱(180×180×60cm)に、1基当たり葉数3枚の苗を1株ずつ定植した。用土は、田土のほか、1株当たり赤玉土小粒(14ℓ入)2袋、ぼら土微粒(16ℓ入)2袋を混合した。

(2) 温度管理

室温は最低20℃以上、水温は最低25℃以上になるように管理した。

(3) 施肥管理

肥料は定植10日後から発酵油粕大粒(1粒約6g)を1株当たり40粒施用した。追肥の間隔は、7～8月は1週間に1回、9～11月は1か月に1回とした。

(4) 調査方法

調査は水面上にある全ての葉を対象とし、平成20年7月22日から11月17日にかけて1～9日毎に出葉数及び葉身の直径を計測した。

(5) その他

7～8月は、生育促進のために晴天時を除き、6時から20時の間、500Wの白熱灯による補光を行った。白熱灯は1株当たり1基、水面より約15cm上方、株の中心部から約60cmの位置に設置した。栽培期間中、葉が黄変しはじめたものは随時切除した。

2. 生育状況

(1) オオオニバス

- ・出葉数 29枚
- ・最大直径葉 143cm(8月下旬)

(2) パラグアイオニバス

- ・出葉数 50枚
- ・最大直径葉 126cm(9月上旬)

(3) その他

パラグアイオニバスはオオオニバスと比較すると



写真・手前：パラグアイオニバス 奥：オオオニバス(11月2日)
出葉数が約1.7倍と多く、最大直径ではオオオニバスよりも小さいものの、夏期には多くの葉を展開させ、葉縁が高さ15cmにも立ち上がり高い展示効果をもたらした。しかしながら、9月にピークを迎えたあと、10月頃には草勢の弱まりが顕著であり、12月には観賞できる葉はなくなった。一方、オオオニバスについては、1月まで観賞することができた。また、例年梅雨時期には日照不足から生育が停滞することから補光を行ったが、平成20年7月1日から8月10日までの西日本の降水量が平年の50%未満とかなり少なく、日照時間が多かったため、補光の効果については判定ができなかった。

3. まとめ

例年、8月に実施するオオオニバス試乗体験会において葉身が最大になるよう1～3月定植による栽培を行っていた。今回6月に定植したことで、8月下旬の試乗会には使えなかったが10月のグリーンフェア期間中に大きな葉が多数展開し、観賞価値の高い状態で展示することができた。次年度も一部で6月定植を試み、生育状況を観察することとしている。

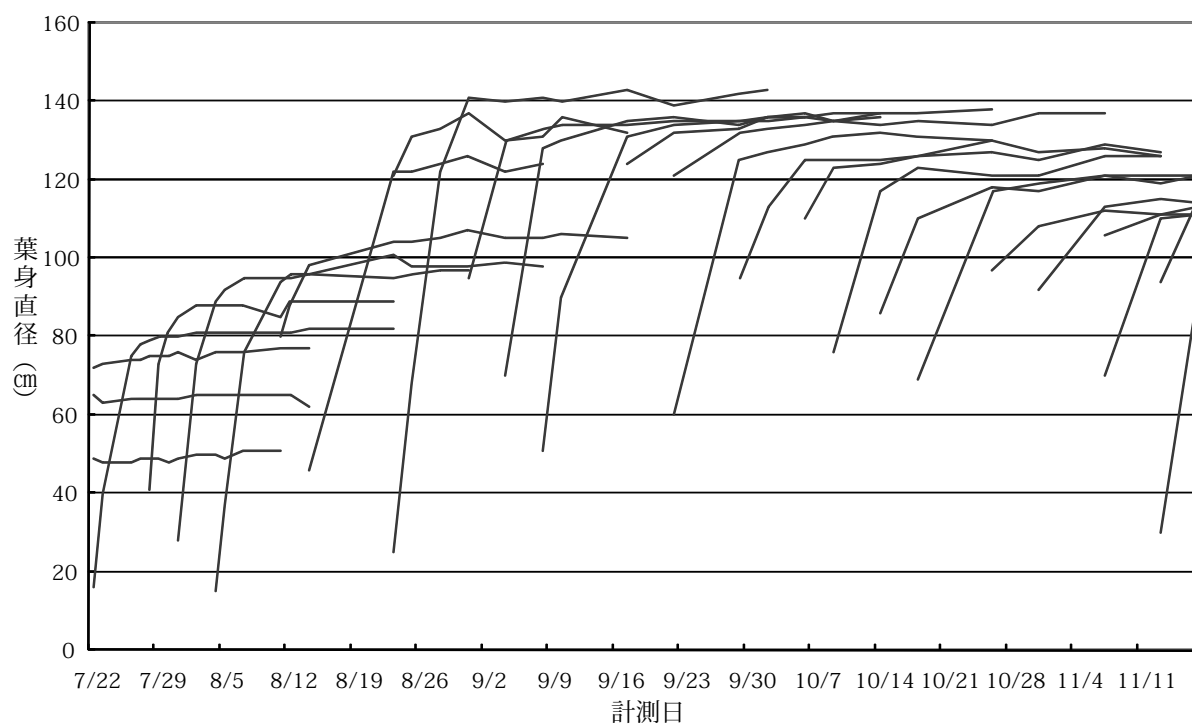


図1. オオオニバスの葉身直系の推移

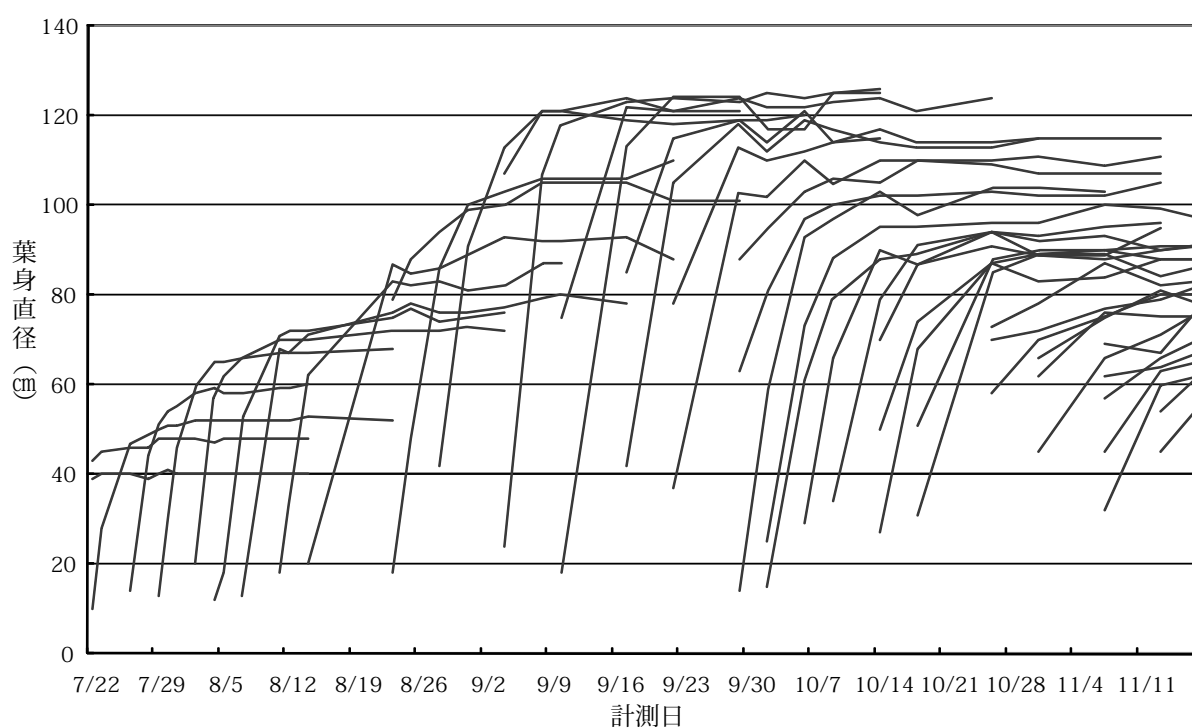


図2. パラグアイオニバスの葉身直系の推移